



〈責任〉のポリティクス(第1部・第2部)

上野, 成利

(Citation)

社会思想史研究, 24:82-84

(Issue Date)

2000-09-10

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001167>



〈責任〉のポリテイクス（第1部・第2部）

（司会・世話人） 上野 成利

日本の戦争責任をめぐる議論は、とりわけここ数年來、活発な論争の場をかたちづくってきた。しかし〈責任〉の主体をどう位置づけるかという論点をめぐってはそれぞれの論調にかなり大きな開きがあり、必ずしも噛み合った議論がなされてきたとはいえない。そうした論争のもつれを解きほぐし、〈責任〉をめぐる議論そのものを問いなおしてみようというのが本セッションのもくろみである。当日はまず早尾貴紀氏と別所良美氏に

報告をしていただき(第1部)、さらにそれを受けて岩崎稔氏と岡野八代氏に論点を提出していただいたうえで、「責任」をめぐる諸問題について全体で討議を行なった(第2部)。

まず初めに早尾報告で提起されたのは、いわゆる「慰安婦」問題を考えるにあたっては、何よりも「慰安所」制度をつくった日本軍の帝国主義戦争、さらにその背景にある世界経済システムに目を向けねばならないのではないかと、ということだった。早尾氏によれば、フーコーのいう「生—権力」は「慰安所」制度をも貫いていたのであって、その意味で「慰安婦」問題は近代資本主義国家の生産性そのものに深くかかわっている。ここで問題となる「暴力」とは、近代国家が資本主義的生産関係を維持するために組織し、法に従わせることで「国民」を形成することをめざした暴力なのである。要するに、国家の内部でも外部でもない「植民地」における「国民」形成の過程で、性差別・民族差別・階級差別という三重の差別となって作用した暴力、これこそ「慰安婦」問題を考えるうえで見据えるべき「暴力」の実相だというわけだ。こうして早尾氏は、われわれが「慰安婦」を想起することはたんなる文学、主観的な反省にとどまるものであってはならない、と指摘する(詳しくは「現代思想」九九年六月号所収の早尾論文を参照)。

一方、別所報告は、「過去の反省」をめぐる問題にあえて正面から接近しようとする。別所氏によれば、「責任」とは何よりもまず「他者」の声に「主体」が応答することにはかならないが、そうした苦悩にみちた「他者」の声に耳を傾けることが可能と

なるには「他者」の被害意識にたいする共感能力が前提となるという。だが、「主体」がもし自らの被害意識を抑圧し忘却してしまうならば、「他者」の被害意識に共感を寄せることもできなくなるだろう。むしろ被害—加害の二元論を超え、被害と加害とが絡み合った過去を多面的に記憶する努力の先にこそ、「責任」を引き受ける「主体」の可能性も出てくるのではないかと別所氏はいう。ただし戦争責任という問題領域にあつては「他者」は集団的な切斷線をともないながら現われるため、この「他者」を契機として構成される「主体」もやはり「集合的主体」とならざるをえない。こうして別所氏はハーバーマスの「憲法愛国主義」をも念頭に置きながら、「他者」の声に開かれているような共同体帰属意識——「反省的ナシヨナリズム」——の形成が重要になるだろうと指摘する(『戦争責任と「われわれ」』(ナカニシヤ出版)所収の別所論文も合わせて参照されたい)。

こうした別所氏の提起にただちに批判的なコメントを寄せたのが岩崎氏であった。別所氏は「被害」意識を足がかりに議論を組み立てようとするが、しかし戦後数十年を経てようやく「加害」が問題となってきたというのが現状なのであって、何よりもまず「加害」をこそ問うべきではないのか。しかも別所氏の議論は、「責任」を引き受けるにはまず「主体」を立ち上げねばならないという論理になっており、また「よいナシヨナリズム」があるかのようにいうが、われわれはむしろ「主体」化、「国民化」への強い要請のなかですでに生きているのではないのか。要するに「主体」の理解があまりに素朴すぎるのではないか。

——岩崎氏はこのように別所報告にはらまれる問題点を指摘したうえで、それへのアンチテーゼとなるであろう早尾報告をこそ積極的に評価したいという。

それについて岡野氏のコメントは、むしろ早尾氏に向かつて根本的な問いを投げかけるものだった。すなわち、「慰安婦」問題を「慰安婦」を構成した構造の観点から考えることはたしかに重要だが、しかし現に告発している彼女らを前にして、告発されている「へわれわれ」をひとまずペンディングすることなどできないだろう、と岡野氏はいう。告発されているのは「へわれわれ」なのであり、「慰安婦」と向き合わざるをえないはずの「へわれわれ」の位置を不問に付すかのような早尾氏の議論は、そのままだでは「責任」という問題に向き合うことにならないのではないか、というのである。同様の問いかけは数人の参加者からも提出され、また早尾氏だけでなく岩崎氏にもそれは向けられたのだが、しかしこの点にかんする回答は少なくとも直接的には示されないままに終わった。

このように整理すると、あたかも早尾―岩崎ラインと別所―岡野ラインとの違いだけが浮かび上がったように思われるかもしれないが、しかし「集合的主体」の次元で論を立てようとする別所氏と何よりも「個的主体」にこだわろうとする岡野氏とのあいだにも、小さからぬ懸隔があることは明らかだろう。しかも岡野氏は、そうした「個的主体」がいやおうなく「集合的主体」の一員として同定されざるをえないことをも引き受けねばならないといい、ナシヨナリズムを頭から否定する議論とも

一線を画そうとするのだから、四者の議論はますます錯綜する。おそらくこのあたりに「責任」をめぐる問題を論じることの困難があるのだろう。参加者数も三〇名ほどに及び、かなり激しいやりとりが交わされた本セッションだが、「責任」があることと「責任」をとることとのあいだで議論が逼塞してしまった観があるのはやはり否めない。とはいえ、すれ違いの生じる場所をとにかくも確認できたことの意味はけっして小さくはないだろう。問題をさらに掘り下げてゆく作業については今後に残された課題として受けとめたい。